

千葉県栄町酒直地区におけるムラオビシヤの戦後史

—ある神人のライフストーリーを通して—

金子祥之*

Post-war History of the Village *Obisha* Ritual in Sakanao of Sakae Town, Chiba Prefecture:
As Seen through a Villager's Life Story.

Hiroyuki KANEKO*

Abstract

In this paper, I examine how the *obisha* ritual (a ritual held by villages on New Year's Day) was conducted from the mid-1950s to the mid-1960s through the example of the Sakanao area in Chiba Prefecture, Japan. Recently, it was revealed that the *obisha* ritual, which is of cultural value and thus merits attention, continues to be passed down in Sakanao. The time period examined in this paper is viewed by the people who live in the area today as the "old *obisha*" era. As such, there is a need to clarify how the ritual was conducted during this period.

Examination of a villager's life story revealed the two following facts. First, the *obisha* ritual during this period did not only feature the "ceremony" that has garnered much attention today but, also, "hospitality" entailing feasts and entertainment. Second, although only male head of households were permitted to participate in the *obisha* ritual, there was a principle of full participation whereby households without a male head of household could also participate in the ceremony, albeit indirectly.

It is in these ways that the "old *obisha*" differs from the *obisha* ritual of today.

1. 戦後の「古いオビシヤ」をめぐる

(1) オビシヤ行事の衰退傾向

本稿の目的は、地域社会の正月行事であるオビシヤを題材とし、この行事が酒直地区において、昭和二十年代から三十年代にかけてどのように執り行なわれていたのかを明らかにすることにある。

本稿であつかうオビシヤ行事について、大島建彦はつぎのようにまとめている。「関東の東部の農村では、俗にオビシヤなどと称する、年頭の神事にあたるものが、かなりさかんにおこなわれてきた。…(引用者注・オビシヤは)農事の開始にさきだつて、あらかじめ弓を引いたものであったといえるであろう」(大島、二〇〇二、一六)。

オビシヤ行事は関東地方にみられる年頭の行事であり、関東の多くの地域社会で盛んに行なわれていた。しかし、現在では行事の存続が危ぶまれている現状がある。というのも、オビシヤ行事が分布するのは首都圏に位置する地域社会であり、阿南透が指摘する通り、混住化・都市化によって、とくに一九八〇年代以降、著しい変容が生じているからである(阿南、一九九八、一四八)。

本稿でとりあげるオビシヤ行事は、千葉県栄町酒直地区のムラオビシヤである。このオビシヤは、弓射儀礼を欠くが、早くから注目され、一九四三年に堀井陽一によって御山式やお宮渡式といった興味深い儀礼が行なわれていたと報告されている(堀井、一九四三、五三―五五)。さらに近年では、生方徹(二〇〇八)が現状調査を行ない、行事が現在も引き継がれていることを再確認した(同、五二)。

生方はまた、御山式がオビシヤ行事のなかで重要な位置をしめる、

「オツイダ」の儀礼であることを見出した(同、五二―四)。これにより酒直のムラオビシヤは、オビシヤ行事一般を理解するうえでも、注目すべき豊かな儀礼を残していることが明らかになった。しかもそうした儀礼が、生方が確認したように、戦前期のそれをほぼそのままのかたちで引き継がれているのである。

けれどもその一方で、地元の人びとは、この行事がとくに昭和五十年代以降に大きく変容したと語る。そこで本稿では、酒直のムラオビシヤが大きな変更を加えられる以前、すなわち、戦後の昭和二十年代から三十年代にかけてどのように行なわれてきたのかを検討していきたい。この期間は、地元の人びとが「古いオビシヤ」が行なわれていたと認識する時期である。

(2) ライフストーリーの有効性…茂市さんとムラオビシヤ

昭和二十年代から三十年代というオビシヤの戦後史を明らかにするために、本稿では、ある個人のライフストーリーに注目する。ここで言うライフストーリーとは、「個人のライフ(人生、生涯、生活、生き方)についての口述オラトワの物語」(桜井、二〇一二、六)であり、「個人のライフに焦点をあわせてその人自身の経験をもとにした語りから、自己の生活世界そして社会や文化の諸相や変動をホリスティック全体的に読み解こうとする」(同)方法論を指している。

地域社会の行事をとらえるにあたって、なぜ個人のライフストーリーに注目する必要があるのだろうか。オビシヤのような地域行事の場合、その行事に参加するさまざまな人物を取り上げ、多様な声をと

らえることが普通である。そのような「多様な声」をとらえる方が、より地域の行事の実態を反映した記述ができるからである。

しかし本稿では、「多様な声」をとらえる重要性を認めながらも、つぎの三つの理由から、あえて湯原茂市さんという個人の語りに注目する。それらは茂市さんとムラオビシヤとのかかわり方が、じつに特徴的なものであることを示している。

第一に、長期にかかわる関与である。茂市さんがオビシヤに初めて参加したのは、昭和二十三（一九四八）年のことであった。それから昭和五十九（一九八四）年まで、サンペイ家を代表して三十六年間オビシヤに出席しつづけた。これだけでも長期間にわたる関与だと言えるが、その後もかわりはずだった。昭和六十（一九八五）年から平成八（一九九六）年まで氏子惣代、平成九（一九九七）年から平成二十七（二〇一五）年までは責任役員となり、神社役員という立場でオビシヤに参加した。つまり茂市さんが行事にかかわった期間は、六十八年の長きにわたる（表1）。

第二に、茂市さんが行事に関与したのは、オビシヤ行事が大きく変容してきた時期であるという事実である。茂市さんは、昭和二十年代三十年代のムラオビシヤを知る貴重なひとりである。そこで本稿では、茂市さんの経験を通じて、長らく行事にかかわってきた人びとの考える「古いムラオビシヤ」がどのようなものであったかを明らかにしたい。

第三に、茂市さんはオビシヤに、異例な関与をしたことである。通常、ムラオビシヤに参加することができるのは、一家の戸主に限られ

表1：茂市さんのオビシヤとのかかわり

時期	オオド	年齢	茂市さんのコメント	金子補足
昭和13(1938)年	大野久悦	6歳 教え7歳		キュウジニン(給仕人)をつとめる
昭和23(1948)年	後藤利治	16歳	初参加	
昭和41(1966)年	浅倉勉	34歳	初参加から19年間、昔のままで御奉社祭を行って来た	昭和23年から41年までは大きな変化がなかった
昭和42(1967)年	後藤肇	35歳	時代の変化で祭典の行い方に少し変えようと区内で話が出て、42年より改める	昭和42年から行事の変化を求める声が出る。それを受けて、オビシヤ規約を改定
昭和57(1982)年	湯原茂市	50歳	この16年間は旧の行い方で、21日午後1時に小殿頭と他12社が大殿宅に参集し、22日の祭典のすべての準備を致す。午前12時、神社にて客方集まり、亭方一同祭典を行う。終了後青年館にて宴会を行い、午後6時に客方は新大殿、亭方は大殿宅に引上げて12時頃迄酒宴会を行って来た。	オオドを引き受ける。42年に規約が改訂されたものの、どちらかと言えば、旧慣を尊重するかたちでオビシヤが執行されてきた。ただしこの間にオオドの保管資料が整理されてしまい、古記録類がなくなっていた。
昭和58(1983)年	石原繁夫	51歳	57年迄規約もなく、前日祭典の一切の準備をなすとの紙一枚だけだったので、石原宅にて新旧大殿、区長にて昼夜三日間かけて、規約第一号を作成する。その規約により、58年より行っていく事となる。	あらためて執行規約を用意する。
昭和60(1985)年	大三川芳男	53歳	神社役員をつとめる (～平成8年まで)	氏子惣代をつとめる
平成3(1991)年	後藤功	59歳	荒神社を守護する。その年に幟旗作成を依頼し、有志12人で作成する。大殿奉社記録を作成するため、遡及調査を実施する。	①幟旗、上下など祭礼用具を整備 ②オビシヤの基本的資料を整備する調査を行なう
平成9(1997)年	大野弘	65歳	神社役員をつとめる (～平成27年まで)	責任役員をつとめる
平成27(2015)年	後藤良一	83歳	68年間、神社の祭典に関する事をする	引退

聞き取り調査および『奉社記録』をもとに筆者作成

る。したがって多くの場合、就職や結婚などを経験し、三十代になつてから初めて出席する。だが茂市さんは、十六歳から行事へ参加することになった。茂市さんが若くして行事に参加するのは、あとで詳しく述べるように、戸主である父の死が深くかかわっている。このように男性戸主がいない場合、オビシャ行事への参加は、どのようになされていたのだろうか。こうした問いに茂市さんの事例は答えてくれる意味でも貴重な事例である。

以上のように、茂市さんという個人の語りに注目することでしか見えてこない、オビシャ行事の姿があることがわかる。そこで本稿ではライフストーリーという方法によって、ムラオビシャの戦後史を考えていきたい。

2. オビシャにかかわるようになるまで

(1) 初めてのオビシャと父・寅吉の死

茂市さんが初めて参加したオビシャは、キュウジニン（給仕人）として加わった、昭和十三（一九三八）年のものであった。キュウジニンは、オヤマ式で七歳の男子が行なう役である。

オヤマ式のマダゴやる前に、袴を着てオヤマ式に参加した人へ御神酒をつぐんですよ。父親に連れて行かれたんです。緊張してましたね。わかんないから。初めてオビシャというものを見るんですから。「酒つぎはこうやるんだよ」と、教わってはいても、うまくできなくてね。親の手を借りてやりましたけどね。

〔キュウジニンは自分ひとりではなく〕相手と二人いるからね。相手の人は早生まれで、しかもその家（オビシャの当番宿である大野久悦家）の親戚の子だったですよ。私よりもその子の方が気が利いてね。親戚の家だから、自由に中を歩けるでしょ。私はずいぶん戸惑って、父親に助けてもらった。片方の男の子は気が利いていたから。どうもみじめな思いをしたように、七歳の心のなかで思いましたけどね。

これが茂市さんにとって、初めて参加したオビシャの記憶である。オビシャに参加できるのは各家の戸主だけであり、そこに七歳の男子が二人だけ加わることができた。しかもこの時代、オビシャは集落の最重要行事として見られており、厳粛に執り行なわれていた。このような場に、二人ばかり幼子に加わるのだから、緊張感が高まるのも無理のないことだった。現在では少子化が進み、七歳の男子に限定することはできなくなっている。しかしこの時点では、キュウジニンの資格をもつのは、「跡取り息子である七歳の長男」だけであった。

とはいえ、キュウジニンの役目はオヤマ式の酒つぎだけであり、このときにはオビシャのごく一部分にだけふれたことになる。「オヤマ式が終わると、「オヤマに飾りつけられていた」幟旗と鶴亀をひとつずつ分けて、ほかに煎り花をいただいてひとりで帰ってくるんですよ。父親はオビシャの方へ入っちゃうから、「おめえ、気をつけて帰れよ」なんて言われてね。家に着くと、（いただいた幟旗を）母親が神棚に納めてくれた」。

七歳で初めて参加したオビシヤの記憶がこれほど鮮明なのは、オビシヤという行事に参加できた嬉しさだけでなく、じつはこれが父・寅吉との最期の思い出のひとつであるためだ。茂市さんの父は、この年の秋に病死してしまう。

当時、東京に働きに行った人が、腸チフスで病気になるって帰ってきた。その人が亡くなったのが真夏だった。当時はハエがいっぱいいたらしいのよ。だから食べ物にうつって。それからしばらくして父は腸チフスになった。その秋だから、二、三ヶ月で亡くなったんですよ。その頃は、よその地域から「酒直には行くな」と言われていた。伝染病（腸チフス）が流行っているからって。うちの父ばかりでなく、何人か病気になる方がいた。ただ他の方はみんな助かったんですよ。

腸チフスは、明治二十年以降、全国で毎年二万人以上が罹患する病であり、一九四五年には約六万人が罹患していた。戦後になって患者数は急減するが、この当時は決して珍しい病ではなかった（厚生省医務局、一九七六）。

父が病気になるたときの家族構成は、父、母、七歳の茂市さん、四歳の妹、二歳の弟の五人家族であった。「当時、お寺さん（酒直にある多宝院）の前に、後藤医院っていう町医者があった。そこに入院していたんです。治療というよりも、ただ入院しているだけで。その当時は分からなかったけど、結局、他の人にうつらないように隔離されて

いたんです。よその人と接触がないように」。

父との最後の記憶をつぎのように語っている「もう助からないということを母が聞いて、会いに行きました。母と私と妹の三人がね、父が病院で布団から顔をあげているところを、遠くから眺めて。そのとき母は、助からないとは言わなかった。ただ『親父さんに会いに行くべ』って言うから、『じゃあ行こう』って」。伝染病に罹患したため、会話を交わすこともできず、ただ遠くからその姿を眺めることしかできなかつた。

（2）苦しかった家の状況

茂市さんは自身の半生をふりかえって、つぎのように語っている。「他の人から見ると、お金の面とか仕事の面、世の中のこと、一番苦労した方ではないかな」。そのように語る理由はおもに二つに分けられる。一つは、サンペイ家は茂市さんで五代目という若い分家であり、家産が少なかつたこと。そしてもう一つは、いま見てきたように、幼くして父が病死してしまつたからである。順を追って当時の状況をふりかえってみたい。

当時のサンペイ家の家産は、田畑を合わせても六反歩ほどであったという。それに小作している畑も含めて、ようやく八反歩になる程度だった。そのため、これらの田畑から得られる収量は、「家族がやっと食べるだけだった。（田畑の面積は）酒直でも一番少ない方だった」。

家産が限られていたにもかかわらず、突然父親を失い、残されたのは三人の幼子と母親ひとりであった。つまり、サンペイ家の労働力は

母ひとりになってしまったのである。窮地に陥ったサンペイ家を支えるため、母だけの妹・よねが手伝いに来てくれるようになった。「叔母さんが色々手伝ってくれて。嫁入り前だから、当時、十七、八歳か。母と二人で田んぼや畑をやっているのを見ましたね。真っ暗にならな」と帰って来ないんですよ、母も叔母さんも」。

女手二人での農業は、厳しいものだった。「その当時の農業は」稲を刈ったら家まで持ってきて、庭で足踏みでこいでね、筵で干して。

籾すりしてお米にするんだから。うちは母ひとりだったから、十一月か十二月ころになっちゃう。よその家はもうちよつと早く終わるけど。田植えも稲刈りも酒直で一番遅いから、収量も少なかったと思いますね」。

農作業の遅れは、もちろん労働力の不足からだだが、それを補おうとすればさらに作業は遅れていた。手間を借りると、その分を手間を返す必要が生じるからである。

田んぼから稲を持ってくるんでも、牛とか馬で荷車に載せて持ってきたんですよ。近所の後藤良彬さん宅で牛飼ってたのね。

そのうちが牛で稲や何かを運んでくれた。ただ一日運搬を頼むと、母は三日働かなくてはいけない。牛は二人前、それからその人が一日来るから一人前で、合わせて三人前。三日も行かなきゃいけないから、仕事が遅れちゃうんだよね。でもそうでもしないと稲を持ってこれないから、やっぱり、ありがたかったですよ。

このような厳しい家の状況は、茂市さんのライフコースにも大きな影響を与えた「昭和十八（一九四三）年に小学校終わって、昭和二十（一九四五）年終戦の年に尋常高等小学校を卒業したら、『田んぼや畑なんか今やる人いないんだから、高等学校は行かないように我慢しなさい』と母に言われて、『いいよ、田んぼやるよ』と。学校は好きでした。行きたいなと思いましたがね、母の気持ちを考えたら、うちは我慢するしかないんだとあきらめて。十四歳のときから家の仕事を手伝いました」。

このように茂市さんは、苦しい家の状況を目の当たりにし、またその状況を理解しながら、それらを受け入れつつ青年期を過ごしてきた。その当時の本音を、つぎのようにも語っている。「親がしっかりしている人は良いなって、その当時は思ったね。何で俺はこんなに苦労しないとイケねえのかなって、思ったりしましたけど。やっぱり、こういう家に生まれたから仕方ないんだというような、あきらめも半分入って頑張んなきゃいけないな、ということになったのかな」。

では、どのようにして茂市さんは、オビシヤにかかわるようになるのだろうか。

3. 「地域の仕事」としてのオビシヤへの参加

（1）「大人」として参加したオビシヤ

男手を失ったサンペイ家であったが、集落を構成するひとつの家であることには変わりがない。そのため、母・たけは、女性世帯主として、「地域の仕事」にも加わっていた。だが、茂市さんが高等小学校を

卒業し、家業を手伝うようになる、「地域の仕事」を茂市さんに任せようになっていった。

二組の会議〔集落のうち、二番組という班組織の寄り合い〕とか、酒直の会議〔集落全体の寄り合い〕にはよく行きましたよね。〔高等小学校を卒業した〕十四、五から母が「お前行け」っていうから、母の代りに出ました。大人のなかに、子どもがいるようなもので使い走りさせられたり、「わからないのか」なんて怒られたり、苦労しました。会議に出てもわからないし、行っても発言することはできないから、ただ黙って聞いているだけ。

茂市さんは異例の早さで「地域の仕事」にかかわるようになった。発言することもなく、ただ聞いているだけであったが、それでも会議に出ることに意味があつたと茂市さんは言う。なぜなら番組の会議にせよ、集落全体の会議にせよ、こうした場ですること地域を生きるうえで必要な知識を身につけることができたからだ。〔会議に出るようになって、世の中〔地域社会〕の動きがわかるようになった〕と語っている。

異例の早さで「地域の仕事」へかかわるようになったが、それからしばらくして、オビシヤに出るようになると声がかかる。「昭和二十三年（一九四八）年に初めてオビシヤに出生した。昭和十三（一九三八）年に父が亡くなって、母は女だからオビシヤには出られない。だからうちでは、昭和十四年から二十二年までは誰も出られなかった。高等

科二年が終わり、それからしばらくして、近所のおじいさんに『おう、オビシヤに連れて行ってやるから支度しろ』なんて言われてね』。

酒直のムラオビシヤは、男性戸主だけが参加できる行事である。そのため戸主・寅吉を失ったサンペイ家は、誰もその場に参加することができなかった。茂市さんが父と一緒に参加した、昭和十三年のオビシヤを最後に、オビシヤに加わることはできなくなったのである。だが「地域の仕事」に顔を出し、経験を積みはじめた茂市さんを見て、サンペイ家に牛を貸すなど付き合いの深かった後藤良彬さんが、出席するように声をかけた。

そうして初めて、「大人」としてオビシヤに参加することになる。「まだ十六歳ですから、オビシヤで何をするのか分からなかったけど、『学校終わったんだからオビシヤに出ろよ』って向こうから言われたので、それから、出るようになったんですね。連れて行ってもらったのは、ありがたかったですね。」

初めて参加したオビシヤの印象を茂市さんはつぎのように語っている。このときには、ソウキユウジ（総給仕）という役をつとめた。

最初は、ソウキユウジって言うのをやってね。キユウジン（給仕人）と言うのは七歳の子どもだけけど、ソウキユウジは全体のこと色んなこと頼まれて。「おめえ酒買って来い」とか、「山に行つて野老取つて来い」とか、「魚焼け」とか、頼まれて色々やりました。ソウキユウジは、荒神〔荒神社を受けたコダシラのこと〕につぎは何々、そのつぎは何々って頼まれるから。ソウキユウジって

言うのは二人いるんだけど、結構忙しい。御膳出したり、火鉢を用意したり、座布団配ったり、昔は色々雑用が多かったですね。

ムラオビシヤにはじつにさまざまな役割があり、それらを分担することでおビシヤを執り行なっていた。その役には、野老役、煎花役、煙草役、料理役、配膳役、吸物役、酒番役、燗役、総給仕、下足番などがあつた。これら役割の詳細については、つづく『素羽鷹神社奉社記録』でふれるが、これだけの役割分担が必要であつたことから、ムラオビシヤが盛大に行われていたことが伺える。

茂市さんが、担当したソウキウジは、それぞれの役割の不足をサポートするもので、全体に気を配る必要があつたが、行事の多くの場面にふれることができた。

(2) 女世帯主となつたサンペイ家とムラオビシヤ

すでに述べたように、ムラオビシヤは男性戸主のみが参加を許された行事である。そのため、サンペイ家では父が死去したあと、「昭和十四年から二十二年までは誰も出られなかつた」ことを確認した。ではこの間、サンペイ家はムラオビシヤと、何のつながりをもつことはできなかったのであろうか。

このことを考える際に、酒直地区のおビシヤを特徴づけるオニツキと呼ばれる儀礼文書に注目したい。オニツキとはおビシヤに見られる儀礼文書であり、常総地方を中心にその存在が確認されている。⁵⁾酒直の場合、オニツキはおビシヤで祀る神々の神体と考えられており、毎

年のおビシヤでおニツキが書き継がれ、新しいものが一番外側に巻きつけられる。こうしておニツキの束による分厚い御神体が作られている。酒直の場合、この当時のオニツキは二枚一組で構成されており、一枚目には、現在のオニツキのように祭神の名を記した。そしてもう一枚には、村びとの名前を書き連ねた。そして村びとの名前を書き連ねたもののうえに、祭神の名を記したものを巻きつけて、二枚一組のオニツキとなつていた〔金子、二〇一八〕。

サンペイ家のように、突然の出来事で戸主を失い、しかも跡取りがまだ若く次世代への継承がスムーズに行かなかつた場合、オニツキにはどのように記載されることになつたのだろうか。

鎮守社（素羽鷹神社）のおニツキを例にとつてみると、つぎのような記載内容であることがわかつた。まず、茂市さんが父と一緒に参加した昭和十三（一九三八）年のオニツキは、戸主である父の名前だけが記載されている。茂市さんは、七歳でキウウジニンをつとめたが、オニツキにはあらわれていない。翌昭和十四（一九三九）年のオニツキには、サンペイ家の人びとの名は記されていない。これは男性戸主が不在になつたことで儀礼の場から排除された結果ではない。そうではなくて、葬儀を出した家はおビシヤに参加できないというおビシヤの禁忌にもとづくものである。すなわち、前年の秋に父・寅吉が逝去したため、一年間の喪が明けておらず、サンペイ家はこのおビシヤにかかわることができなかつたのである。

昭和十五（一九四〇）年から昭和二十二（一九四七）年まで、オニツキには母・たけ（タケの記載もある）の名前が記されている。すで

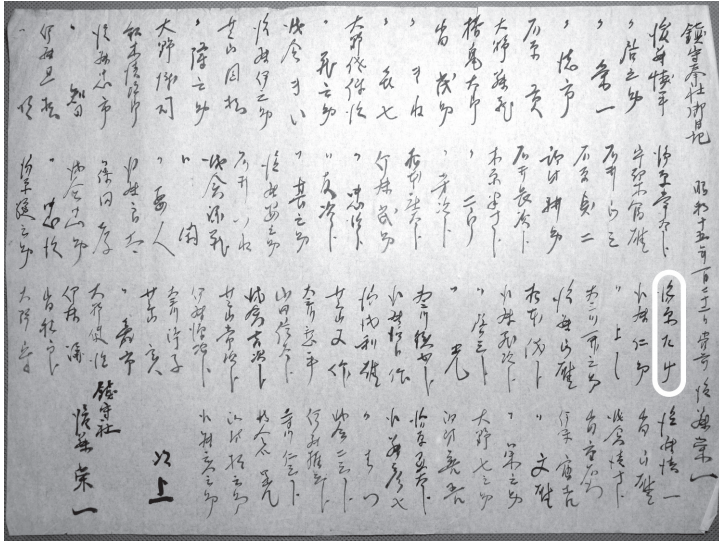


写真1：昭和15年オニツキとサンペイ家の記載（母タケの名がある）

に見たように、サンペイ家はこの期間オビシヤには誰も参加していない。しかし、オニツキには母の名前が記されている（写真1）。つづき昭和二十三（一九四八）年は、茂市さんが初めてムラオビシヤに参加した年であるが、この年、そして翌年のオニツキにはサンペイ家の名は記されていない^⑥。

つづく昭和二十五（一九五〇）年から昭和三十六（一九六一）年まで、オニツキに記載されていたのは、母・たけの名であった。この期間、茂市さんはオビシヤの場に参加しているが、記されているのは母の名であった。茂市さんの名が初めてあらわれたのは、昭和三十七（一九五七）年、茂市さんが三十歳になるときのことだった。

これらの事例からわかるのは、オニツキに記載される名が、儀礼の場に「一座したものだ」ではないことだ。オニツキには、儀礼の場には七歳のキユウジニンは記されていない。その一方で、昭和十四年から昭和二十二年までのサンペイ家では誰もオビシヤに参加できなかった時期には、母の名がある。さらにはその後、茂市さんがオビシヤに出るようになってからも、しばらくの間は母の名が記されており、「ムラオビシヤに参加したもの」と「オニツキに記されるもの」との間には、大きな隔絶があることがわかる。

では、「オニツキに記されるもの」とは、いったい誰なのだろうか。このことについて、茂市さん自身は、サカマイ（酒米）を提供した家の名だと理解している。かつては秋の収穫のあと、オオドとアイドが、枘と吠袋を持って集落内の各家をめぐった。各家から新米を受け取り、それをもとにオビシヤで用いるドブロクを作った。現在でもオビシヤの費用を酒米料として各家から集めているのは、その名残りである。オオドは枘を持って各家に新米を求めたが、そこにどれだけの米を入れるかは、各家の状況に応じて自由であった。すなわち、二杯も三杯も渡す家もあれば、食べるのに困る家では少量でもよかった。このような家の状況に応じた費用負担の仕組みによって、集落内の

どの家もオビシヤのサカマイを負担することができた。そしてオビシヤの費用負担をした家が、オニツキに記されるのだという。その結果、集落内の総戸が儀礼文書に書上げられることになる。

ここまで茂市さんがオビシヤに参加するまでの状況を、茂市さん自身の語りを活かして描いてきた。そこでつぎに茂市さんが経験した「古いオビシヤ」の様子を明らかにしていこう。茂市さんの言う「古いオビシヤ」とは、昭和二十年から三十年代年の、現在のような省略が加えられる以前のオビシヤを指している。

4. 茂市さんが経験した「古いオビシヤ」…『素羽鷹神社奉社記録』

この章では、茂市さんが記録した『素羽鷹神社奉社記録』(以下、『奉社記録』)をできるだけ尊重し執筆した。『奉社記録』は、筆者の聞き書きに際して、昭和二十年代三十年代の「古いオビシヤ」が現状よりも、ずっと豊かな内容を含んでいたことを説明するために、茂市さん自身が整理したものである。この『奉社記録』は、茂市さん自身が見聞きし、実体験したこと、すなわち経験したことだけに依拠して書かれている。「書かれたもの」ではあるが、筆者に「話すため」の基礎資料として整理されており、その意味でライフストーリーと言ってよいものである。

ただ作成の経緯からわかるように、ひろい読者を想定したものではないため、酒直のオビシヤについてある程度の知識がないと読みこなせないのも事実である。そこで、『奉社記録』を尊重しながら、以下のような改稿を加えた。第一に新字体を用いること。第二に明らかかな誤

字脱字は、確認のうえ金子が修正した。第三に発話、唱え事などは「」を補った。第四に金子による加筆部分には、これまでの章と同様に「」をつけた。第五に各節の最後に、金子によるコメントをつけた。

『奉社記録』の記載にしたがって、オビシヤの祭祀組織の説明からみていこう。

(1) オビシヤと祭祀組織…オオドとテイガタ

1. (オビシヤと村びとの役割)

・十四社を奉し祭典を行う。殊に酒直区内一二三組、四五六組と区内を二分に致し、社の奉仕は一年毎に交互に守護する事とする。

2. (オビシヤの役割)

・毎年一月二十二日から翌年の一月二十二日迄守護する。素羽鷹神社守護者を大殿と言う。(アイドは) 相殿として守護する神社はないが、大殿が年内中、守護出来ない事が出来た場合は、代わって大殿する。

・他の神社十三社守護する方を小殿と言い、荒神社守護者を小殿頭と言う。

・大殿守護する家は、一月二十二日より一年間、家の門の両脇に松木の皮を取り、両側に立て七五三縄を一年間張る。一年の内に切れる時は、又新しい稲わらで作り奉る。

3. (オオドの勤め)

・大殿一年間に種々やる事がある。

・毎月月の始めの吉日に、素羽鷹神社の清掃をする。

・年の十一月から十二月にかけて、吉日にその年にとれた新米を頂きに、袋と杵を持ち、各家々から酒米として頂いて歩く。約百戸の家。(遠きその昔は、その米で、大殿宅でドロク酒を大樽に何樽も作ったという。酒の好きな方々が酒役と言って、正月になると味を調べに行き呑んだとの事を聞いた)。

・翌年度の大殿と相殿を依頼し、決まれば決まり酒を持参して、翌年度の大殿宅へ大殿相殿区長にてお願いに行く。

〔オオドが用意する物〕

・魚：小魚約百匹位(遠い昔は、近くの沼や、水の多いところの水をはらい、件の魚を獲り、生かしておいたと聞く)。

・炭：炭窯で一窯焼き、約十袋位、客の暖房及び料理用を使用。

・薪：数多く必要。多くはお客の料理作りに使用。その他にも。

・野老：山芋みたいなもので、根の多くある物。お客が花をつけて遊ぶ用品。

・餅米：いり花用。お客が野老につけて遊ぶ用品。

・西の内：和紙で四枚。鶴二羽、煎り花入れ箱を折る和紙。西の内の先祖は茨城県那珂郡山方町西の内。

・味噌：一桶に一杯位。

・その他：客用高膳、座布団、火鉢、野菜種々多数。

・松の木：三段の根のある木一本。

・雨戸板：お山用。

・タライ：新しい物。お山松等植える。

〔前日の参集者〕

・御奉社祭典の前日、一月二十一日朝八時頃、小殿守護者一同、各一年間守護した社を持って大殿宅に集合し、翌日二十二日の祭典の一切の準備をする。

・総奉行役として区長も来る。

・大殿の庭にのぼり旗用の竹を立てる。

〔テイガタの役職〕

・各役職を決める。

・書記二名。一切の書き物をする。

・会計すべての金銭の計算。収入支出。

・総奉行役。総奉行誰々殿と書く。区長名。

・御座奉行役。同じく名前誰々殿。区内の長老者に依頼する。

・荒神社守護者。小殿頭は全体の役員を取り仕切る。

・白幡社守護者は無役。

・魚役二名。魚は背から開いて焼く。

・野老役二名。山より獲り洗って根の多いのを揃える。

・煙草役二名。キザミ、紙巻煙草。

・酒爛役二名。酒爛。

・総給仕人二名。年の若い方がなり、料理等種々お客に出す。他仕事。

・全部の役職の人の名前を書いた半紙を客席部屋のなげしに貼る。

〔前日準備〕

・その他の方お山の飾りつけをする。雨戸板の上に、木のタライに

松の木を中心に植え、回りに各神社の御神体をならべる。鶴、亀、竹、梅の枝、のほり旗二本、煎り花、野老、角切り沢庵二鉢、田楽二本ずつ。御神酒大殿より一本。徳利二十、杯多数。

・その他すべて用意し、全部出来たら、小殿頭荒神社守護者が調べて、異常がないか確認。書記も間違ないか調べて用意が出来たら、総奉行に報告し、すべての準備終わり。夜食を頂き各人帰宅する。

〔前夜のオオド〕

・その後は大殿は床の間においてある各神社にローソクを立てて火を付けて、家の中の灯を消して、おごそかに拍子を打ち一年間の我が家の安泰を礼し、今後の我が家の幸せと安泰を祈る。大殿は身の引き締まる気分になる。

・一年間で大殿宅に十四社が入る一夜は二十一日だけである。

ここに示されているテイガタとキヤクガタ、さらにはオオド、アイド、コドといった基本的なオビシヤの祭祀組織は、現在でも大きな変化はない。小さな変化を挙げれば、現在では、ソウブギョウ（総奉行）・オンザブギョウ（御座奉行）という役職は廃止され、区長と氏子惣代へと変わっている。

加えて『奉社記録』からは、当時、オオドがオビシヤにあたって準備しておくべき物品が大変多かったことがわかる。これらはキヤクガタをもてなすために用いられる物品であった。これらの物品を用いて、キヤクガタを接待するために、多くの役職が設けられていた。

(2) 当日準備からオヤマ式まで

御奉社当日一月二十二日

〔当日準備〕

- ・一三番組神社守護者を亭方と言う。四五六組を客方と言う。
 - ・午前八時亭方関係者集合する。
 - ・総奉行（区長、又部落長〔がなる〕）。
 - ・御座奉行役として区内の長老が総奉行より指名される。
 - ・両奉行も八時に大殿宅に入る。
 - ・総奉行の指示に従い、神事やその他について、各亭方一同行事について執務する。
 - ・庭にのほり旗をあげる。
 - ・客間の座敷中央にお山を置く。
 - ・客席に座布団を敷き、火鉢客二名に一鉢ずつ置く。
- 〔二バンツケ〕
- ・小殿頭の荒神社守護者九時に他一名を連れて、二名にて神官宅に行き、「二番付けに参りました」と申上げる。依頼する神官は、「二番付け」と言う言葉を聞き、「承知致しました」と了承する。
 - ・十時頃各神社守護者は、徳利に酒を入れ杯を持ち、四五六組の客方の各家に行き、「二番付けに参りました」と申上げ、酒をつぐ。
 - すると客方はオンベ銭と言って、十円玉をくれた。（その遠き昔は一銭位だったかもしれない。）
 - ・守護神社により、行き依頼する家は決まっていた。客人によっては大殿宅より遠い方は、途中まで家を出て来る客方もいた。

・客方は着物に羽織を着て、下駄や草履を履いて来る人もいた。客方の人数は約四十名から五十名位だった。客方の人が大殿宅に入ると、履物に名前を書いたコヨリを付ける。

〔祭典開始〕

・総奉行、床の間の前に座り、脇に御座奉行が座る。
・総奉行、客方にも皆来て頂いたので、「只今から素羽鷹神社の祭典御奉社を執り行います」と申上げる。

・次に神官に祝詞を依頼する。

・神官お山の前に出て座り、祝詞を申上げる。

〔抽選〕

・次に客方に各神社の守護する抽選を行う。小殿頭に各神社抽選券、十四社を客の数により、空籤客数により入れる。

・〔総奉行〕「只今から各神社の次年度守護する方の抽選を行います。

小殿頭用意して下さい」。

・小殿頭、客の人数に合わせて用意する（十四社と空籤の数〔を足して客方の人数と同じになるようにする〕）。

・総奉行、「只今から、各神社十四社の抽選を行います」。

小殿頭、客方にコヨリにした抽選券を引いていただく。

・総奉行、「当選した方は、神社名を読み上げますので、大きな声で名前を言って下さい」。鎮守社、相殿は決定しているので、荒神社より十三社を読み上げ、書記〔が〕記録する。

・当選者は神社の名を書いたコヨリを胸の羽織の紐につける。

〔オヤマ式〕

・総奉行、次に御座奉行に「お山式を行います。御座奉行お願いします」と指示する」。

・御座奉行、それでは只今からお山式を行います。まず、大殿相殿、新大殿相殿で一座、その他は客の数により二座ないし四座とする。
・大殿、相殿、新大殿、新相殿、御座奉行、五名がお山の廻りに座る。

・ここで長男で七才の男子二名、上下着を着て、羽織、袴を着て座る。七才の男子が御神酒の入った徳利で、御座奉行と大殿、相殿に御神酒をつぐ。大殿、相殿、新大殿、〔新〕相殿が御神酒を呑みほす。

・御座奉行がでは「お山の四方を手で持って下さい」と申し、お山を持ち上げ、一同で、「マアダゴ、マアダゴ、マアダゴ」と三度申し、「御手を拝借、ヨオー」シャンシャンシャンと三度拍子を打ち、「おめでとうございます」と皆で申し上げ、一座終わる。

・次に客の数で二座ないし、四座を同じく御座奉行の指示でやり終える。

・総奉行、「以上でお山式は終わりましたので、各御神体は箱に収めてください」。「小殿頭に各神社の抽選券は持って、お山を片付けて下さい」と指示する」。

・亭方でお山を座敷より片付ける。お山の松の木は素羽鷹神社に植える。

・又大殿は、七才の男の子二名にも祝金をあげる。男の子に、のぼ

り旗、鶴、亀差し上げ帰っていただく。

儀礼的な要素に注目すると、オビシヤ行事のうち抽選やオヤマ式といった儀礼は、この当時のやり方をほぼそのままの形で現在にも継承されている。大きな変化は、儀礼の場がオオドの個人宅から神社へと移ったことに限られる。儀礼そのものに変化が少ないものの、儀礼に至るまでの過程は全く変わっている。テイガタがキヤクガタを迎えに行くニバンツケは、現在は全く失われているからである。すなわち、キヤクガタをもてなす過程が省略されている。

(3) 宴席と当渡し儀礼

〔宴席〕

- ・ 総奉行、「只今から宴会を行います。御座奉行、よろしくお願ひいたします」と申し上げる。
- ・ 御座奉行、拍子〔を〕二度打ち、小殿頭を呼ぶ。
- ・ 小殿頭、「ハハ」と言い、御座奉行の前に出て、両手をついて、「何か御用でしょうか」と答える。
- ・ 御座奉行、「料理のお膳を出しなさい」と言う。
- ・ 小殿頭、「ハイ」と言い、料理役に御膳を出すよう指示する。
- ・ 料理役、客一人一人の前に高膳、朱椀を載せて出す。
- ・ 御座奉行、拍子を打ち、「小殿頭来なさい」と申す。
- ・ 小殿頭、「ハハ」と言いながら両手をついて、「御座奉行様何でございましょうか」と言う。

- ・ 御座奉行、「酒を最初の一献出しなさい」。
- ・ 小殿頭、「ハイ」と答え酒役二名に酒を出すよう命じる。
- ・ 酒役が客一人一人に、朱椀の蓋に酒を注いで歩く。
- ・ 御座奉行、又拍子〔を〕二度打ち、小殿頭を呼ぶ。
- ・ 小殿頭、「ハハ」。「次は何ででしょうか」と申す。
- ・ 御座奉行、「魚を出しなさい」。
- ・ 小殿頭、「ハイ」と答え、魚役に魚を出すよう命じる。
- ・ 魚役二名、小魚を背から開きピン焼きした物に、トウガラシを切り刻み、味噌にませたものを魚の上に載せて客に出す。
- ・ 御座奉行、又、御座奉行が拍子を二度打ち、小殿頭を呼ぶ。
- ・ 小殿頭、「ハハ」。「次は何の御用ででしょうか」。
- ・ 御座奉行、「野老を出しなさい」。
- ・ 小殿頭、「ハイ」と言い、野老役二名に煎り花（餅米を煎った物）と共に出す。「野老に」煎り花を付けて遊ぶ。火鉢に竹串をさして。
- ・ 御座奉行、又奉行の拍手が鳴り、小殿頭を呼ぶ。
- ・ 小殿頭、「ハハ」。「今度は何の御用ででしょうか」と申し上げる。
- ・ 御座奉行、「酒二献目を出しなさい」。
- ・ 小殿頭、「ハイ」と言つて、酒役に酒を出すよう命ずる。
- ・ 酒役二名、二献目を客に注いで廻る。
- ・ 御座奉行、又、拍手二度鳴り、小殿頭を呼ぶ。
- ・ 小殿頭、「ハハ」と言いながら、御座奉行の前に出て、「次は何の御用ででしょうか」。
- ・ 御座奉行、「煙草を出しなさい」と言う。

- ・小殿頭、「ハイ」と申し、煙草役二名に〔指示する〕。
- ・煙草役二名、煙草と、膳の隅に小さく切った紙の上にキザミ煙草を出す。
- ・客の中には、「俺はキセルを忘れたので、紙に巻いたのをくれ」と言う客もいた。(遠き昔は、キザミだけの時代もあった)。
- ・御座奉行、また拍手二度で小殿頭を呼ぶ声がある。
- ・小殿頭、「ハハ」。「次は何を出しましょうか」と申上げると、
- ・御座奉行、「おにぎりを出しなさい」。
- ・小殿頭、「ハイ」と申上げ、総給仕人におにぎりを出すよう言う。
- ・総給仕人二名、小皿の上におにぎり二個ずつと、魚のすり身汁を客に置き歩く。
- ・客の内でも、家が貧苦の人もいて、おにぎり神社当選券と取り替えた人もいた。
- ・御座奉行、拍手を二度打ち、小殿頭を呼ぶ。
- ・小殿頭、「ハハ」と両手をつけて、又、「御用でしょうか」と申すと、
- ・御座奉行、「用があるからまた呼んだのだ。最後の三献目の酒を出しなさい」と申す。
- ・小殿頭、「ハイ」。「承知致しました」と、酒役に三献目の酒を出すよう命ずる。
- ・酒役二名、客に酒を出しに出る。三献目は親椀で呑む事に決まっている。三献目を注いで回る。
- ・中には酒をあまり呑めない人は、断る人もいたが、呑める人は「もつと注げ」と言う人もいた。

〔ミヤワタシ式〕

- ・時を見、総奉行、「この辺で宴会は終わりにしたい。空籤を引いた方々はお帰り下さい」。
- ・空籤を引いた客(「へ」は、下足係〔が〕履物を間違いないよう、名前を見て渡す)。
- ・〔ミヤワタシ式〕
- ・〔御座奉行〕「次にお宮渡式を行いますので、高膳を片付けてください」。
- ・総給仕人、高膳を片付ける。
- ・亭方は一年間守護した各神社を自分の前に、自分の方を向けて、上座に座る。(御神体を収めた箱を明け、その蓋の上に)杯を載せる。
- ・鎮守社(大殿、相殿、荒神社、白幡社、日枝社、稲荷社、弁天社、愛宕社、浅間社、天神社、御霊社、水神社、鷲神社、子の神社、疱瘡社、以上の順に並んで座る)。
- ・客方も同じ順で、下座に座る。
- ・総奉行が書記の記録した書物を持ち、「神社名と守護者名を申し上げるので、『ハイ』と大きな声で返事をして下さい」と言う)。
- ・〔総奉行〕「では只今からお宮渡り式を行います」。
- ・まず鎮守社、「誰々殿より誰々殿に渡る」と申すと、給仕人が御神酒、大殿が奉納した酒を注ぐ。それを呑みほし、神社を客方の方に渡す。客方は御神酒を呑み、神社をいただく。
- ・次に相殿の引き渡しをするが、相殿は「オオドに不幸があった場合の代役であるため」守護社がないので、荒神社を借りて引き渡す。

・次に荒神社も同じく、「誰々殿より誰々殿へ渡る」と申し上げ、引き渡す。

・全部の社の引き渡しが終わわり、式が終わると、客方は各神社を胸に抱き、新大殿宅に新大殿を先にして送り込みに入る。

〔オクリコミ〕

・途中〔新〕大殿宅までの間、歩きながら大声を上げながら、新大殿宅に入る。各神社新大殿宅の床の間に置き、別室にて一同控える。

・新大殿宅でも座敷に宴会の用意ができています。

・旧大殿宅では、宴会席を新しく作る。

・又、素羽鷹神社御奉社に使用した、神社用品を新大殿宅に、旧荒神社守護者他四名五名にて、新大殿宅にすぐ届け受け取っていただく。

・届けに行った五名に対し、新大殿宅では、客室に料理を用意してあり、すぐ料理をいただく。約一時間ごちそうになり帰る。

〔オイザカモリ式〕

・新大殿宅では、神社十四社守護者より、祝宴会に入る。十二時頃まで料理をごちそうになり、各人十三社をいただき、散会して帰る。

・又旧大殿宅では、大殿を座敷の中央にて、亭方の方々に「マアダゴ、マアダゴ、マアダゴ」と言いながら、大殿を何度も持ち上げる。

・そして、新大殿宅に物品を届けた方が帰って来たら、又新しく料

理を出していただき、こちらでも十二時頃まで宴会をする。

・両大殿宅で十二時に終わり帰宅する。

・素羽鷹神社の祭典が終わる。

〔片付け〕

・それから約三日位、旧大殿宅では荒神社守護者、相殿、又会計係で後片付けをやる。残酒の整理、火鉢、朱碗やその他用意した物品、食器などの片づけをする。

・一切の片付けが終わわり、旧大殿宅で片付けに参加した方々で、最後の祝賀会をやり、一切の祭典の行事が終わる。

『奉社記録』のうち、とくに貴重なのは、宴席からミヤワタシの過程を示した本節の記述である。また『奉社記録』では、これらの過程でのやり取りを生き生きと描写している。これらの過程はトウマエと呼ばれるオビシャの当番を引き継ぐ当渡し儀礼であり、当時は、この儀礼に付随して多くの儀礼が行なわれていたことがわかる。しかし現在、当渡し儀礼はミヤワタシ式だけに簡素化されており、そこに見られた宴席、あるいはその後に行なわれていたオクリコミやオイザカモリ式は全く失われてしまっている。

5. 結論…ライフストーリーに見る戦後のムラオビシャ

本稿では、オビシャ行事を事例に、酒直地区においてこの行事が昭和二十年から三十年代にかけてどのように執り行なわれていたのかを明らかにしてきた。その結果明らかになったのは、つぎの事実である。

この時代のオビシヤ行事には、現在につづく〈儀礼〉だけでなく、もてなしの過程である〈饗応〉が多く含まれていた。すでに述べたように、酒直のムラオビシヤの記録としては、大戦下の一九四三年の堀井論文がある。これと比較した場合、茂市さんのライフストーリーからは、宴席や接待などの〈饗応〉の詳細が明らかになる点で特徴的である。すなわち、堀井論文では、オビシヤの〈儀礼〉を中心に記録したのに対し、ライフストーリーからは、戦前からの〈儀礼〉が戦後ほぼそのままのかたちで継承されていたことが明らかになるとともに、現在は失われてしまった〈饗応〉の姿が生き生きと浮かび上がる。このように見ると、たしかに酒直のムラオビシヤは、現在も豊かな〈儀礼〉を伝えているが、その一方で〈饗応〉の場面を大きく減らしてきたことがわかる。

さらに運営の面でも大きな変化がみられた。この時代には、オビシヤは地域の最重要行事のひとつと位置づけられており、厳粛に執行されていた。そこに参加できるのは、男性戸主に限られ、その意味でオビシヤは閉鎖的な行事であるようにも受け止められる。しかしながら、茂市さんのライフストーリーから伺えるのは、サンペイ家のように男性戸主が不在となった場合でも、オビシヤの儀礼に加える仕組みが作動していたことである。

現在オビシヤに参加することは、それぞれの家の自由意思に任せられ、民主的な運営がなされている。だがこの当時は、その場に一座することができない事情を抱えている家であっても、すべての家を儀礼に加えようとする、いわば総参加原理が働いていた。すなわち、酒米

を集める場面や、オニッキを記す場面では、集落を構成するすべての家を儀礼に加えようとするオビシヤ行事の運営原理を見てとることができた。このような点が、現在とは異なる「古いオビシヤ」のあり方なのであった。

最後に、茂市さんが自身のムラオビシヤへの考えがわかる部分を引用して本稿を終えたい。これはムラオビシヤの場で、神社役員として挨拶する際に話した内容である。

昭和五十年以降、だんだんと省略されるようになってきた。オビシヤっていうものは何百年って先祖伝来の継承されてきているものだから、「酒直のムラオビシヤは」酒直にしかないものだから、我々は後世に伝える義務がある。あんまり略してわかんなくなっちゃってもいけないし。よそには立派な神様や仏様もお祀りしてあるし、そのために旅行したりお参りすることもあるけど、酒直にもこれだけ素晴らしい社がいっぱいあるんだから、地元のを大事にして後世に伝えるようにして欲しいと。頑張ってくださいと（語ってきた）。

この発言には、長らくムラオビシヤを見つめてきた人の考えが率直にあらわれている。冒頭述べたように、多くの地域でオビシヤ行事は省略されつつしてきた。そうした中で、茂市さんたちのような考えをもつ人たちの存在が、地域行事を存続するにあたって、重要な意味をもったと考えられる。その結果として、酒直のムラオビシヤでは、〈饗

応」過程が省略されつつも、豊かな〈儀礼〉が残されたのである。

注記

- (1) 民俗学においても方法論として個人に注目すること、すなわち、「個人の判断や個人のおかれた状況によって行為としての民俗」〔福田、二〇〇二、一八〕をとらえる必要が提起されている。
- (2) なお本稿では、茂市さんの語りや記述に触れる際に、省略部分を補う場合には、() を用い、筆者の判断で加えた部分には「」の記号を用いている。
- (3) 内山節〔一九八八(二〇一四)〕は地域社会において、「稼ぎ」と「仕事」の意味が異なることに注目した。「稼ぎ」が賃労働を指す一方で、「仕事」は「山村に暮す以上おこなわなければ自然や村や暮しが壊れてしまうような諸々の行為」を指すという。この表現にならって、ここでは地域社会のための活動を「地域の仕事」と表現した。
- (4) 世の中(Ⅱ世間)について阿部勤也は「個人と個人を結ぶ関係の環」〔阿部、一九九五、一六〕であると定義し、属人的な世間理解を示した。しかし、ここで茂市さんが言う世の中とは、むしろ属地的な世間であり、酒直というひとつの地域社会を指している。
- (5) 詳しくは水谷〔二〇一六〕、および水谷・渡部編〔二〇一八〕参照のこと。
- (6) これは茂市さんの叔父・叔母が続けて亡くなり、それを受けて酒米料を遠慮したためと思われる。

引用文献

- 阿南透、一九九八、「オビシヤ研究史」『野田市史研究』(九)、一一九—一五四頁
- 阿部勤也、一九九五、「世間」とは何か』講談社
- 内山節、一九八八(二〇一四)、『自然と人間の哲学』、のち『内山節著作集6』自然と人間の哲学』農山漁村文化協会、所収
- 生方徹夫、二〇〇八、「オビシヤ考(その二) — 祭事にみる心意伝承」『成田市史研究』(三三)、三五—六一頁
- 大島建彦、二〇〇二、「オビシヤと酒」『西郊民俗』(二八二)、一六一—二〇頁
- 金子祥之、二〇一八、「オビシヤとオニッキ儀礼—千葉県印旛郡栄町酒直」水谷類・渡部圭一編、『関東の村の祭り』と記録—オビシヤとオニッキの世界』(仮題)岩田書院(印刷中)
- 厚生省医務局、一九七六、「衛生統計からみた医制百年の歩み」『医制百年史付録』ぎょうせい
- 桜井厚、二〇一二、「ライフストーリー論」弘文堂
- 福田アジオ、二〇〇二、『近世村落と現代民俗』吉川弘文館
- 堀井陽一、一九四三、「オビシヤ」『民間伝承』九(二) 五三—五五頁
- 水谷類、二〇一六、「オビシヤ文書の可能性」『市川のオビシヤとオビシヤ文書』市川市
- 水谷類・渡部圭一編、二〇一八、『関東の村の祭り』と記録—オビシヤとオニッキの世界』(仮題)岩田書院(印刷中)